

第6大洞天「赤城山洞」と第27小洞天「金庭山洞」の現況

土屋昌明

はじめに
桐柏山の金庭山洞
赤城山洞
天姥峰・三茅宮など
まとめ

はじめに

2009年9月3日から9月5日まで3日間、第6大洞天「赤城山洞」と第27小洞天「金庭山洞」の実地調査をした。本稿はその現況と初歩的所見をまとめたものである。

「赤城山洞」は司馬承禎『天地宮府図』に「周回三百里、名を上清玉平の洞天と曰ふ。台州唐興県に在り。玄洲仙伯に属して之を治めしむ」とある。台州唐興県は浙江省天台県付近にあたる。唐の徐霊府『天台山記』には「其の山は石を積めるごとく、石の色は絶然¹として朝霞の如し。之を望めば雉堞の如し。故に赤城と名づけ、亦た焼山とも名づく」とある。これによれば、赤城山は石を積んだようになっており、色が赤いという。

「金庭山洞」は、同上『天地宮府図』によれば、「周回三百里、名を金庭崇妙天と曰ふ。越州剡県に在り。趙仙伯に属して之を治めしむ」とある。剡県は現在の嵊州市あたり。ただし、同じく司馬承禎の撰とされる『上清侍帝晨桐柏真人図賛』には「天台山は一名は桐柏棲山、山に洞府有りて、号して金庭宮と曰ふ」「養真の福境、成神の靈墟と謂ふなり」とある。これによれば、桐柏山は天台山の別名で、金庭山洞は天台山にあることになる。天台県城に面する桐柏山が天台山塊の代名詞とされるのは自然なことであり、だとすると桐柏山に金庭洞があることになる。現地ではそのように理解されているので、今回の調査ではひとまず桐柏山が金庭山洞だと仮定する。

9月3日、調査メンバーは上海浦東空港で集合し、13時ころに空港内の旅行会社でワンボックスカー（運転手付き）をチャーターして出発、高速道路を南に向けて走った。新しくできた杭

1 『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻二十七、中華書局道教選刊本）「周廻三百里、名曰上清玉平之洞天。在台州唐興縣。屬玄洲仙伯治之。」

2 徐霊府『天台山記』（国会図書館本）「其山積石、石色絶然如朝霞。望之如雉堞。故名赤城、亦名焼山」。薄井俊一『天台山記の研究』中国書店、2011年2月、269頁。

3 『天地宮府図』「周廻三百里、名曰金庭崇妙天。在越州剡縣。屬趙仙伯治之。」

4 『上清侍帝晨桐柏真人図賛』（『道蔵』第11冊162頁、上海書店等影印）「天台山一名桐柏棲山、山有洞府、號曰金庭宮」「謂養真之福境、成神之靈墟也」。前半一文は『真誥』巻14に「金庭有不死之郷、在桐柏之中」とあり、後半一文は『真誥』巻11に同じ句が見える。本書の成書年は不明。序に司馬承禎の名があり、あるいは司馬承禎の撰述にかかるか。ただし金庭洞の位置については同じ司馬承禎撰の『天地宮府図』と齟齬がある。

州湾をよこぎる長大な橋をわたって寧波郊外を通過、そこから進路を西に変えた。四明山の山塊を右手に見て走り、途中、王羲之墓を遠方に確認した。16時30分ごろに嵊州市近くのドライブインで休憩。そこから進路をまた南に変え、天台に入ってから左手に赤城山が見えてきて、18時ごろに天台県の街に到着した。

赤城山は遠方からでもすぐにそれとわかるほど、天台山塊から孤立した奇特な岩山であった。一見、ぽっかりと海に浮かぶ江ノ島か蟹気楼のような感じ。街から見える側面は山の中腹からトップにかけて樹木がなく、垂直状に岩面が露出しており、その岩面が赤っぽい。トップに塔が建っていて灯台のようであり、位置を知らせる機能があることがわかる。天台县城は斉公廟もあって観光を主力とする地方の小さな街という雰囲気であった。



天台県の街なみと赤城山そして天台山塊

桐柏山の金庭山洞

現在、赤城山洞を管理しているのは桐柏山の桐柏宮であるよし、北京大学の王宗昱教授から紹介を得たため、調査の段取りとして、さきに桐柏山の金庭山洞から着手し、つぎに赤城山洞の調査に進む。

桐柏山と金庭山洞の関係は、上述の『上清侍帝晨桐柏真人図賛』以外にも、唐代以前の文献に両者の同一箇所であることがみえる。梁の沈約に「桐柏山金庭館碑」の作があった。⁵ 本碑の実物は失われており、石碑がどこに建てられたかは確定できないが、ここである「金庭館」は、金庭山洞に関わる道観で桐柏山に建てられたとみられる。⁶ 同時期の陶弘景『真誥』巻14によれば、桐柏山は現在のいわゆる天台山のことであり、その中に金庭があることになる。⁷ だとすると『天地宮府図』で金庭崇妙天が越州剡県にあるというのは、天台山を嵊州の側から見た言い方ではなかろうか。もし金庭洞が桐柏観の位置から離れた剡県にあったとすると、桐柏観は洞天の列に入

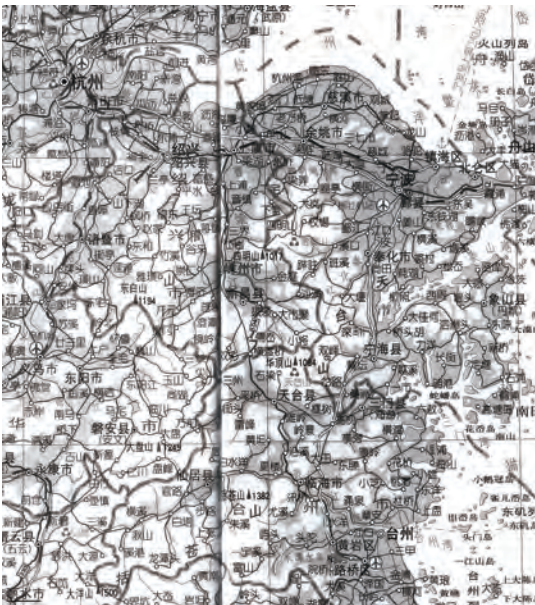
5 『藝文類聚』巻78（汪紹楹校本、上海古籍出版社）。

6 宋の陳耆卿『嘉定赤城志』巻40「弁誤門」（四庫全書本）は、沈約のこの碑が剡県の金庭館にあったのにもとづいて、いわゆる桐柏山は寧海から天台にわたる天台山塊全体を指しているとみる。

7 『真誥』巻14（道藏本）「桐栢山高萬八千丈、其山八重、周廻八百余里、四面視之如一。在會稽東海際、一頭亞在海中。金庭有不死之鄉、在桐栢之中、方圓四十里、上有黃雲覆之」。

らないことになる。司馬承禎は長安に招かれるまえに、桐柏山にある桐柏観に住持していたのであり、その桐柏観が洞天の列に入らないとは考えにくい。以上のことから、桐柏観は金庭山洞に所在した道観であり、洞天思想において特に重要な地位にあるとみるべきである。

以下に浙江省と天台县の地図を掲げておく。天台县の地図で「赤城景区」とあるあたりが赤城山の位置である。



浙江省の地図 『中華人民共和国地図集』 星球地图出版社、2000 年



天台县の地図 浙江省第一測絵院、天台县人民政府弁公室『天台縣交通旅游图』 哈爾濱地图出版社、2007 年

ホテル前で桐柏宮の信徒である朱氏の車に乗って桐柏宮へ向かった。桐柏宮は天台山の奥深くへ入っていく道のもっとも南側にあり、街から車で北へ上がって 30 分足らずである。道路が非常によいのが訝しかったので朱氏に尋ねると、天台山の華頂峰は寧波の海まで見わたしがよい⁸ため、戦時中に国民党がレーダーの基地を建設し、そのためにこの道が切り開かれたが、共産党はその基地を流用し、90 年代末にこの道を軍用に改修したとのこと。

山上へ出ると桐柏水庫（ダム）という人工湖が開ける。そこから左手へ山のへりぞいに入っていくと桐柏宮があった（GPS では北緯 29.1997、東経 121.0128）。天台山塊は街から見て西北から東南にかけて連なっており、現在の桐柏宮はその山塊の西南側面にある。したがって桐柏宮から見ると南斜面のふもとに天台县城が開け、西北側に街道が伸びており、東側には山が続いている。ただし西ふもとは急な斜面になっており、西北に続く山との間にやや広い平地があって、そこには工場らしき建築物が並んでいた。桐柏宮の周囲は山の峰と森林に囲まれているが、南側の視界は開けており、非常に優れた立地であった。建物は多くが新しく、神像も新しいものであった。伝説では、王子晋はここから鶴に乗って昇天したとされ、孫権が葛玄に桐柏真人（王喬）を祀らせた王真君壇があったが、光緒 9 年（1883）に重建されたときに鳴鶴観と命名された⁸。その後、1959 年にもとの桐柏観がダム湖に水没してから、ここと合併して桐柏宮と称するようになったとのこと。



写真左手が桐柏宮入口、中央が客間、右手が食堂

奥にある道長の部屋は、桐柏山の西崖に臨んだ二階建てで、俗人が宿泊する部屋と隣接していた。女性の道士が子供の世話をしていたり、隣室からピアノの音が聞こえたりして、家庭的な雰囲気であった。壁面には道長自筆の書法や符篆があちこちに掛かっていた。若い道士 5 人が勤めていたが、彼らのほとんどは国内を移動しているらしく、桐柏宮の管理委員会は在家が担

8 光緒 21 年（1895）の重建時に立てられた王継序「重建妙楽院碑記」による。趙子廉編著『桐柏春秋』香港：天馬圖書有限公司、2003 年、320 頁。

9 張道長によれば、道士はその道観や道長と「縁」があれば長期間滞在し、「縁」があわなければすぐに移動する。その背景には伝授の問題がある。道士は鍊丹を学びたくても制度化された教学システムが整っていない

当するとのことである。

張高澄道長は1952年生まれ、浙江大学で計算機の教師をしていたが、80年代初の気功ブームで気功のパフォーマンスに参加し、気功を学んだのが道教へ進むきっかけになったとのことである。1982年に天台山桐柏宮の謝希純師について気功を学び、道教龍門派第27代伝人となった。その後、アメリカへ留学して博士を取得、パソコン関係の会社を始めて、かつ在米のままフロリダで桐柏宮のアメリカ支部長になった。2000年に帰国し、桐柏宮に住持したとのことである。

洞天福地について、張道長は自分で少なからず訪問したことがあると言い、おおかた次のような話をした。洞天福地は真人が修道した場所であるから、自分はそれを慕って訪れたのである。修練には環境が重要であり、まず安静、温度・湿度・太陽光線や風が適切なのことが大切である。人間はもともと洞窟に住んでいたものであり、現代人の住居も洞窟を模倣している。洞天福地が歴史的に修道にかなっていることがわかっているのだから、それがなにゆえ人間の環境にとって適切なのかを研究して、その環境を人間が模倣できるようにしたいものである。そうすれば修身のために山中に入らなくても済む。目下、道教の聖地をめぐる宗教旅行を組織的に企画することで道教および道観の復興を進めようと考えており、洞天福地と鍊丹をその軸としようとしている。たとえば鍊丹による養生をしようとするれば、まず養生理論および過去の神仙の経験に学び、道士と相談して訪問地を決めて養生を実践する。たとえば桐柏山から始めて、次に陝西省の紫陽県に行き、さらに広東省の羅浮山に行くというような路線をとる。これは、張伯端から石泰・薛道光・陳楠に伝わり、そして白玉蟾が大成したとされる南宗の伝承を踏むのである。あるいは歴史学者と提携して葛玄が修道した場所を確定し、そこを訪れて養生の実践をするような旅行である。

だとすると各地の道観との提携が必要だと思われるので、各地の道観との協力関係について質問した。張道長によれば、そのために海南省の玉蟾観との関係強化に努めているほか、台州地区の道観では5,6カ所と交流している。しかし、道士の移動が多く、関係はなかなか継続できず、この宗教旅行の企画はまだ実現のめどが立っていないとのことである。通常の祭礼では、天台の西隣に位置する金華市の金華県と東陽県の道観から道士の応援をもらう。これは、金華市とは距離的に近く、道路事情もよいからである。

参拝者については、地元の参拝者はすでに桐柏宮を気にかけていないため、地元の参拝者は多くない。近くに国清寺があるため、そちらに参拝する人々が多い。桐柏宮に参拝にくる人は外地の者が多い（調査当日に同席した参拝者も北京からであった）。台湾からの固定的な参拝者もあり、高雄から来る者が多いほか、フーチーで天台山の桐柏宮へ行けと告げられて来る者もいる。

もとの桐柏観の位置とそこに関わる文物の所在について、六朝以来の桐柏観は山上の桐柏ダ

ため、ついた道士から見込まれなければ教えを受けられない。教えを受けられなければ、すぐにそこを立ち去らざるを得ない。それは「縁」である。また、陝西省や甘粛省から移動する道士の場合は経済的な原因もある。陝西などでは一ヶ月の収入は120元程度だが、浙江では200～300元になる。そのような収入の目的は一種の出稼ぎで、その金を使ってもとの道観の立て直しや修繕の費用にあてる。

10 趙子廉編著『桐柏春秋』によれば、謝希純師は光緒17年（1891）生まれ、1984年10月羽化。張高澄道長の帰国については、謝希純道長を継いで桐柏宮の住持となった葉秋梅師を張氏がフロリダに招いた際に、葉師がフロリダで急逝、桐柏宮の住持がいなくなった後を地元の関係者からの要請で引き受けたようである。この『桐柏春秋』および本文中に引用する褚定済『仙境天台』は張道長より提供された。

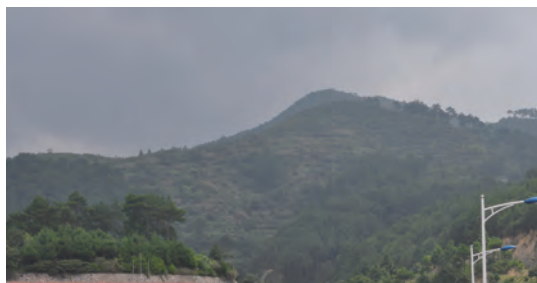
ム湖の水底に没し、文物は桐柏宮が所蔵する若干の石刻だけとのことである。石刻を実見したが、一点は断裂した道教石刻像で年代は不明、石碑は4件で、宋代とされるもの1点（詳細不明）、光緒21年（1895）の王継序「重建妙楽院碑記」、¹¹ほかは故意に文字がつぶされて文字は判読できなかった。

ダム湖に水没したもとの桐柏観の位置を張道長の案内で確認した。ただし、張道長は水没前の桐柏観を実際に見たわけではなく、長老からの伝聞である。現在の桐柏宮から山上のダム湖に戻ると、ちょうど南から北に向けて見渡すことになるが、もとの桐柏観はそのダム湖の中央から北岸近くあたりに存在したらしい。ダム湖には北岸から岬のように湖水に伸びた部分があり、水がなければ、その部分は周囲の峰から離れて突き出た峰であったと想像される。その峰の南側にもとの桐柏観は存在したとのことである。あたかも赤城山が天台山から突き出た峰なのと相似している。そのダム湖の右手（東岸）に聳える峰が青龍、左手（西岸）に聳える峰が白虎の形になっているとのこと。南岸から見ると、たしかにそれと見たてられる地形で、東峰はやや高く鋭く聳え、西岸はなだらかに蟠った感じであった。赤城山はこの東峰の向こう側に位置する。奥の北側に天台山塊がずっと続いている。北が山塊であるため、ダム湖の出水地も南側にある。

要するに、かつての桐柏観は周囲を峰に囲まれた谷にあり、谷に突き出た峰を背後にして南面し、おそらくそのあたりから豊富に出る湧水を利用し、左手にやや高い青龍峰、右手に蟠ったような白虎峰を見て、南は低い峰でやや開けており、溪流が南に向けて流れていた。参詣者は現在の桐柏宮のある山とその西にある山の間の平地から溪流沿いに上がってきて、直立した崖の瀑



ダム湖を南側から、正面が旧桐柏観の所在か



左が白虎峰、右が青龍峰

11 これは鳴鶴観の文物。前掲『桐柏春秋』320頁に簡体字により掲出されている。なお、古い桐柏宮については、神塚淑子「司馬承禎と天台山」（『名古屋大学文学部研究論集』哲学54、2008年3月、79～98頁）を参照。

布を見ながら峠を越えると視界が開けて谷の空間と突き出た峰の中腹にある桐柏観、その背後の天台山が見えたことだろう。

『天台山記』には「洞門より一小嶺（を上ること）二里ばかりにして、乃ち観の処に至る。倚小松嶺（?）。嶺の前は豁然として、平陸数頃あり。四面特起し、峰巒の郭郭のごとき有り」「観の前に田頃余ある有り。東に溪有り、清溪と曰ふ。溪は田に注ぎ、西して三井を経る。飛流瀑布あり」とある。¹²この記述と現場の景観および地勢からの想像は一致するようである。だとすると、『天台山記』にいう「倚小松嶺」とは、桐柏観が突き出た峰の腹に載った格好で建っていたことを表現しているのではなかろうか。また、清溪は西に流れて瀑布となっていたというから、写真でみるダム湖の左手の放水口の方に流れていた。もとはそちらに滝があったのである。そちら側は、現在の桐柏宮で道長の部屋の西側に見えた絶壁に向いている。そして『天台山記』に「天台観より北路して桐柏観に上ること一十二里なり。皆、懸崖磴道にして、盤折して上る」とあり、¹³また「天台観は、唐興県の北十八里、桐柏山の西南の瀑布岩の下に在り」とあることから、¹⁴参詣者はこの西側の滝のある懸崖をうねうねと上がってきたのであり、その懸崖の下方にある平地に天台観が建っていたと想像される。それはおそらく現在の桐柏宮の道長の部屋から西ふもとに見えた工場らしき建物が建っているあたりに近いのだと思われる。

現在、水没地に近い湖岸にもう一カ所新しい桐柏観を建設中で、位置は写真上の一番奥に見える岸の左手である。まだ三清殿の外廓を建設した段階であった。また、周辺にはかつて古い道観が数多く散在していたという地域があった。そこは上の写真の白虎峰の山中で、現在は古い家屋が散在する寒村である。張道長によると、村の家屋の多くが道観だったとのことである。いま見てもそれとおぼしき家屋があったが、村人が居住しているため、立ち入ることはできなかった。現在は道観ないし修行地はなくなっているとのことである。

もとの桐柏観が金庭洞に建てられたと仮定すると、その桐柏観の近辺に金庭洞に相当する洞窟が存在したかもしれないが、近辺は水没しているので確認できない。しかし金庭洞の洞窟の所在については、張道長の話によれば別の見方があり、金庭洞は桐柏観からさらに華頂峰の方へ上がった百丈瓊台とよばれる溪谷に存在するという。この説は長老からの伝聞であるという。張道長から提供された、地元の地方史研究者である褚定済の『仙境天台山』（国際炎黄文化出版社、2003年、105頁）に、百歳をすぎたもと桐柏宮主持の葉宗浜道長が、百丈瓊台の洞窟が金庭洞だと先輩から伝え聞いているとの証言を載せている。その近辺の村は洞天村とよばれ、玉宵宮（洞天宮）が存在したという。¹⁵上掲地図の「桐天」とある場所がそれに相当する。しかし残念ながら、その場で現地を承知しているのはたまたま張道長だけしかおらず、張道長の時間の都合がつかないため、踏査することはかなわなかった。次の機会に譲るしかない。

12 『天台山記』「自洞門一小嶺可二里、乃至觀處。倚小松嶺。嶺前豁然、平陸數頃。四面特起、峰巒有郭郭」「觀前有田頃餘。東有溪、曰清溪。溪注田、西經三井。飛流瀑布」（薄井前掲書、349頁を参照）。

13 『天台山記』「自天台觀北路上桐柏觀一十二里。皆懸崖磴道、盤折而上」（同前）

14 『天台山記』「天台觀在唐興縣北十八里、桐柏山西南瀑布岩下」（同前、331頁参照）

15 葉宗浜（1896～2002）は温嶺の人。8歳で温嶺羊角洞に預けられて道童となり、民国11年（1922）27歳で桐柏山に入る。のち民国30年（1941）まで桐柏観の復興に努めた。1990年代に天台山道教文化研究会・天台山道教協会・紫陽文化研究会顧問。2002年に羽化、享年107歳。趙子廉編著『桐柏春秋』（香港・天馬圖書有限公司、2003年、280頁）による。

桐柏宮から東南方向に赤城山があるが、桐柏宮からは手前に山があって望めない。また、桐柏宮から赤城山をはさんだ東南ふもとに国清寺がある。国清寺は寒山・拾得の伝説で有名な古刹である。

夕食後、19時半ころから桐柏宮にて放焰口の儀礼がおこなわれた。執りおこなったのは唐義思法師という方で、夕食時におこなったインタビューによれば、道教崑山派第23代法師を称している。年齢は45歳前後と思われ、西安出身、北京の白雲觀の道教学苑で学び、武当山へ入ってから、委羽山がある黄岩市に行き、現在は温嶺市の天后宮の道士で、今回の祭礼には桐柏宮から招かれたとのことである。¹⁶

この儀礼とほぼ並行して、20時から張道長による在俗者向け講義が客堂でおこなわれた。聴講者は8名。張道長はパワーポイントで写真入りのレジュメを駆使して『道德経』の紹介および経文の自説による読解を講義した。経文から演繹される自説は、自分の経験にもとづいて『道德経』を読み、そこから道教の理念と効用を演繹した内容だと感じられた。

以上、第27小洞天「金庭洞」については、所在地の問題、桐柏觀との同一性の問題など基礎的な部分ではっきりしない点が多く残されている。もとの桐柏觀が水没しているだけに、その周囲のより詳細な調査だけでなく、剡県（嵊州市）の方向から再び天台山にアプローチするような調査が必要だと思われる。

赤城山洞

9月4日に赤城山洞を調査した。赤城山の公園入口は、天台县城から車で10分程度の近くにある。公園入口から玉京洞までは、まっすぐあがれば1時間程度だと思われる。赤城山は標高300メートル程度の岩山で、西南に面した頂上近くの山腹がえぐれて赤い岩面が露出している。その赤さはやや灰味を帯びた渋みのある赤で、非常に奇特地を感じる。私の乏しい経験では、このような色の山を見たことはない。形といい色といい、なるほど赤城山という命名がぴったりだと感じられた。山道の途中に紫雲洞、済公院、済公東堂などが存在するが、特に済公関連の施



玉京洞外観

16 張道長によれば、当地の道觀は相互の交流が非常に少なく、ほとんど個人的関係によっている。唐義思法師を招いたのも張道長の個人的関係による。

設は現代に作られたもので、考察は別稿（山下論文）に譲る。

赤い岩面が露出した崖の下部に玉京洞が造ってある。道観の入口には「第六洞天」の題額がかかっていた。道観の建物は壁面にある凹みを蔽うように造ってある。桐柏宮の張道長の話では、以前は奥深い洞窟が存在したが、いつしか建物を架けた際に奥を塞いで部屋をいくつか作ったという。現地での話では、それまでの建物は老朽化して雨漏りがひどく、2008年に改修したが、外観の真新しい色彩は大工の恣意的なもので、現地の道士の望んだ色ではない。中央に玉京洞があり、元始天尊・靈宝天尊・道德天尊のほか、靈宝天尊の右手脇侍に葛玄祖師、道德天尊の左手脇侍に魏華存天君の神位があり、真新しい塑像が並べてある。魏華存＝南岳魏夫人については、ここで修行したとか、¹⁷南岳で修行したとかの説があるが、ここで祀られている具体的原因はわからないという。葛玄は、ここで修行したという伝説によっている。ほかに、玉京洞の右側に一室が作ってあり、こちらには観音菩薩が祀られていた。これは、主持の女性道士が観音菩薩を信奉しているからである。その前に古い井戸があり、清い水が採れる。その水でお茶をいただいた。

管理しているのは二人の女性道士であった。主持する吉林省出身の40代の女性は、約10年¹⁸前に住み込むようになって、桐柏宮の指導を受けながらここを管理しているとのことである。彼女の話によれば、この地は80年代に仏教徒によって占拠されていたが、桐柏宮の葉秋梅師（法名高行）が6年かけて地元政府を説得し、この權益を道教協会に回復した（いわゆる仏教徒がどのような集団をさすのかは不明、うち僧の一人は紫雲洞に行ったと）。1999年末に葉秋梅師が臨終のときに、彼女たちに玉京洞を守るよう遺言したために、ここに入った。数人の女性とともにここに來た当初、彼女はまだ20代で、お椀一つなかったという。もっとも貧しいときは、一日8円で6人の生活を営んでいた。

今は儀礼をおこなえる道士もいるが、当日は金華に出張中とのこと。年に十数回の祭礼があるほか、外地から特にここで祭礼をしたいという者のために祭礼をおこなっている。

現地の景観から、徐靈府がいう「積石」とは、砂岩の堆積した地層が横向きに走っており、その堆積層の縞目とその縞目にそって出来た穴の存在が、石を積み重ねたようにみえることを言っていると理解される。また「朝霞」という表現も、朝焼けにたなびく赤い雲のようだというのであろう。その色彩だけでなく、横に縞目が走っていることを含んだ表現であり、これも現地を見てはじめて理解される。さらに「雉堞」とは山の態勢がうずくまった形に似ていることをいうようである。

玉京洞という名称は、宋の陳耆卿『嘉定赤城志』に引く「道書」には「天尊云はく、玄都玉京山に在りて法を説き、衆仙をして此に居らしむ」とあるように、¹⁹天のもっとも高いところにある山の名称をふまえており、宋代において赤城山に「玉京」の名称がすでに与えられていることがうかがえる。また同じ『嘉定赤城志』で玉京洞のことを述べて「（玉京洞は）県の北七里の赤城山右に在り。蓋し第六洞天なり。茅司命の治むる所、或いは太上玉清天と号し、或いは玉真

17 『嘉定赤城志』巻21の玉京洞条で魏華存の治所に言及している。その文は徐靈府「小録」からの引用であるが、これは『天台山記』の異称だと考えられている（薄井前掲書328頁）。

18 桐柏宮の張道長によれば、玉京観は桐柏宮が資金提供して購入し、この二人に委託したが、今では桐柏宮のもとから独立する準備をしているとのこと。

19 『嘉定赤城志』巻21「天尊云在元（玄）都玉京山説法、令衆仙居此」。

清平天と号し、或いは上清玉平天と号す」とある。²⁰この「上清玉平天」は司馬承禎の説によっているものの、茅司命＝茅君は司馬承禎が言及していない。徐靈府『天台山記』にも「即ち赤城丹山の洞、上玉清平の天。周廻三百里、洞門は樂安県界に在り。即ち十大洞天の第六洞なり。即ち茅司命の治むる所なり」とある。²¹後述するが、付近には三茅宮という茅君を祀った道観が存在する。このことから、赤城山と茅山の宗教的関連性が予想される。現在の玉京洞で魏華存が祀られているのも茅山との関係である。ただし、現在の南京茅山との関連を住持者の女性道士に質問したところ、茅山は正一教であって、排除しあうわけではないが自分たち全真教とはちがう、という認識であった。参詣者には女性が多いらしく、住持者も女性であることは、魏華存という女性の神仙が祀られていることの反映であろう。なお、葛玄への祭祀は台州には多く見られるようで、その歴史的な背景は、また別に検討すべき課題となる。²²

ほかの洞天福地との連絡について、住持する女性は自身が外出を好まないのも、よそとの連絡はないが、2008年に第4大洞天（西玄山洞）および第10大洞天（括蒼山洞）、それ以前に第5大洞天（青城山洞）の人がそれぞれ来たので歓待したという。ただし第4大洞天は『天地宮府図』では所在地不明となっており、彼女は「玄」字がつくことと江蘇省から来たことしか想起できなかったのも、現在のどこの道観が第4洞天を自称してここに来訪したのかは不詳。青城山には彼女らも行っていたことがあるとのこと。そうしたところを訪れるのは用件があつてのことではなく、修身のためという。彼女の話によれば、人間が病気になる根本原因は過剰な欲望にあるから、修身によって欲望を少なくするのだという。

当地から北へ進むと嵊州を抜けて紹興に出る。また南に進むと臨海から黄岩の海へ出る。嵊州から東へ進むと寧波である。このような地勢を考慮すると、当地の洞天信仰はおそらく洞天が所在する地域間における物資の流通と関連しているとひとまずは想像される。晋の永嘉の乱以降、山東・河南の門閥貴族が南下して南朝時代に江南の開発が進み、建康（いまの南京）あたりと台州との物資の流通とともに、宗教的関連が形成されたのであろう。晋の孔曄『会稽記』によれば、「赤城山には玉室璇台有り。許邁嘗て之に居る。因りて王羲之に書を与へて云はく、天台山より臨海に至るまで、金台玉室、仙人芝草有ること多し」とある。²³許邁（300～348）は茅山で降霊をおこなった楊羲と交遊のあった道士である。その彼が赤城山に住して、嵊州生まれの王羲之に上述のように「赤城山あたりはいいところだから遊びにおいで」という趣旨の手紙を書いたというのは、あながち事実に悖らないように思われる。こうした点から、茅山と赤城山および天台山、

20 『嘉定赤城志』巻21「在縣北七里赤城山右。蓋第六洞天。茅司命所治。或號太上玉清天、或號玉真清平天、或號上清玉平天」。

21 徐靈府『天台山記』「即赤城丹山之洞、上玉清平之天。周廻三百里、洞門在樂安縣界。即十大洞天第六洞也。即茅司命所治也」（薄井250頁参照）。

22 薄井前掲書334頁に葛玄と天台山の関係を示す文献記事をあげているのが参考になる。

23 『嘉定赤城志』巻21に引く孔曄『会稽記』は佚書。「赤城山有玉室璇臺、許邁嘗居之、因與王羲之書云、自天台山至臨海、多有金臺玉室、仙人芝草」。同じ内容が『初学記』巻8に引く『道書』に次のように見える。「天台山、其上八重、視之如一。中有金庭不死之郷。許邁與王逸少書曰、自山至臨海、多有金堂玉室、仙人芝草、已上台州」。

24 許邁の伝記として古くから『雲笈七籤』巻106所収「許邁真人伝」がある。これは王羲之の撰した可能性もある。

さらに臨海や黄岩の洞天の存在は、晋代の道教の宗教的な関連を反映しており、それは物資の流通にもとづいているのではないかと想像させられるのである。

さて、玉京洞の周辺道観としては、さらに右手奥に登ったところに法雲洞という道観がある。管理者は住み込んでいるようだが、道士はいない。建物はすべて新しく建てられたもので、見るべき遺物はない。ここにも洞窟はないが、さらにそこより山腹を北にまわった地点に湧水がある。湧水量は多くないが、水が出る壁面をコンクリートで囲ってため池にしてあり、山麓の溪流はここから流れていると思われる。コンクリート下のもとの河道は、左右の斜面を浸食して削って、扇状に谷間を形成している。そこには草が茫々と生えていて見えなかったが、斜面の一角に人が居住できる洞窟が複数存在しており、つい最近まで中年の女性が一人でそこに居住して修道していたとのことである。日当たりがよく、自然水があるとはいえ、どのように生活していたかはよくわからない。

ちなみに赤城山の山上にある梁妃塔は、近頃建築されたもの。ここからは天台县城が一望でき、また县城の西側に広がる山岳地帯が一望できる絶景である。

天姥峰・三茅宮など

天台山近辺にあると思われる第 16 小洞天の天姥峰の所在について、桐柏宮の張道長と討論した。『天地宮府図』には「剡県の南に在りて、真人魏顕仁に属して之を治めしむ」とある²⁵。しかし張道長によれば、李白の詩「夢游天姥吟留別」に「天姥峰」がみえることから、華頂峰の近くではないかというのである。このため 9 月 5 日に華頂寺まで車で上がり、寺内の調査の後、寺の関係者の紹介で道観跡を尋ねて周辺の山道を探索した。山道には民国時期の摩崖などが残留し、そこがかつて游客のあった地であることが確認されたが、道観や洞窟の遺跡は確認できなかった。華頂寺まで戻ってさらに上へ登ると、李白讀書堂という場所が地元政府によって認定されており、記念のモニュメントが造ってあった。しかし、ここが李白のいわゆる天姥峰であるかどうか、その根拠は不明である。そこから華頂峰のトップを見あげられたが、上に軍事関係施設が存在するために登れず、上からの景観は確認できなかった。

天姥峰について、徐霊府は「天台山より西北に一峰の、孤秀廻拔にして、天台と相對する有りて、天姥峰と曰い、下は剡県路に臨み、仰望すれば宛かも天表に在るがごとし」という²⁷。また宋の謝靈運の「登臨海嶠」にも「暝に剡中の宿に投じ、明に天姥の岑に登る。高く高くして雲霓に入り、還た期するも那ぞ尋ぬべけん」という²⁸。これによれば天姥峰は嵊州の方角に面しており、秀拔な高峰であるらしく、華頂峰の位置および景観とは異なるようである。地元の天台山研究者である許尚枢は実地踏査をふまえて、華頂峰から西北、かつての剡県寄り（嵊州市の東南、新昌県）

25 『天地宮府図』「在剡縣南、屬真人魏顯仁治之」。

26 『嘉定赤城志』卷 40「弁誤門」に引く『会稽志』はこの説であり、天台華頂峰に接すると言って李白の当該詩を引いている。陳耆卿はこの説を認めつつ、臨海県にも同名の山があるとする。

27 『天台山記』「自天台山西北有一峰、孤秀廻拔、與天台相對、曰天姥峰、下臨剡縣路、仰望宛在天表」。

28 謝靈運「登臨海嶠」「暝投剡中宿、明登天姥岑、高高入雲霓、還期那可尋」（逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』「宋詩」卷 2、北京：中華書局）

29 なお、華頂峰の近くの景勝地には、石梁などを有する方広寺がある。

の天台山中にある万馬渡峡谷に臨む峰が李白の言う天姥峰だとする。³⁰

さて、9月6日朝から三茅宮を調査した。三茅宮という道観の存在は張道長から教えられたもので、事前には知らなかった。天台鎮から西北に隣接する白鶴鎮の農村にある。現在まだ建設途中だが、もともと古い道観が存在したらしい。住持する道士はいない。桐柏宮の張道長がこの再建に関わっているようである。桐柏観の三茅君とは、句容の茅山の茅君兄弟のことであり、この場所と句容の第8大洞天句曲山洞との宗教的な関連性が予想される。宋の陳耆卿『嘉定赤城志』で、玉京洞の治者に茅司命をあげていることは前述したが、この白鶴鎮のこの地点と茅君に何らかの関わりがあったのか、あるいはこの地域の信仰に関わっているのか、詳細は不明である。



三茅宮、背後は天台山へつづく山並み

道観は西南向きになっており、東北側の背後には畑が続き、彼方に峰尖山など桐柏宮や赤城山玉京洞のある天台山塊が望まれる。当地の管理人にインタビューしたが、当観の事情には通じておらず、入手できた資料は非常に乏しい。地誌や道観内に90年代末に建てられた石碑などによって今後調査を進めるべきである。³¹

まとめ

今回の調査によって、赤城山洞の所在である赤城山の景観について一定の認識が得られた。赤城山は、天台山（桐柏山）から南側に飛び地のように立っている島状の山で、高くはないが秀抜である。周囲から屹立して、露出した岩肌が灰赤色、地層が横に筋目を成し、あちこちに凹みがある。赤城山洞は、赤城山の山上の崖にある玉京洞という岩の凹みを利用した道観を中心として、赤城山中のことを指しているものと思われる。山上の比較的高いところから湧水があり、人が居住することができる。玉京洞には、もともと奥深い洞窟が存在したという。

また、金庭山洞は天台山にあり、異説はあるが、現地では桐柏山にあると考えられている。

30 許尚枢『天台山名勝古跡』西安地圖出版社、2004年、141頁。任林豪・馬曙明『台州道教考』（中国社会科学出版社、2009年、105頁）もそれに準じている。

31 茅山の近辺には、当然ながら三茅君の廟観があったことが地方志に記録されている。麥谷邦夫『江南地方志二十五種道教関係記事集成』（平成15年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究(B)「江南道教の研究」研究成果報告書(2)）を参照。天台近辺にも三茅君ゆかりの廟観が存在したことが記録されている。例えば杭州府には七宝山の麓に三茅観があった（『嘉靖浙江通志』巻71、天一閣明代方志叢刊続編本、935頁）。

桐柏山にあった桐柏観は、周囲を峰に囲まれた溪谷の一角にあったが、現在では水没しているので、古来の景観は本文中に想像した程度でよくわからない。近辺には湧水があったために現在はダムとなっているのである。その地に洞窟が存在したか不明だが、古老の言い伝えでは、金庭山洞はそこより華頂峰の方へ百丈の溪流をあがった百丈瓊台に存在する洞窟がそれにあたるとされている（今回は実地調査できなかった）。

『天地宮府図』によれば、この近辺にはほかに第 14 福地「靈墟」、第 60 福地「司馬悔山」もあるとされているが、周辺の道観の管理に関わっている桐柏宮の張道長すら、その所在を承知しておらず、それと判明する現地は確定されていないようである。これらの福地およびその伝承についても、金庭山洞の実地調査とともに今後の調査が期待される。

また、洞天思想と関係が深い三茅君の信仰が、どのように分布し、どんな歴史的経緯があったのかを検討することも、洞天との関わりを考える上で重要な課題となるように思われる。

謝辞

多大なご協力を下された桐柏宮の張高澄道長、そして関係各位に衷心から感謝を表する。